

森下恭光教授のご定年によせて

—思い出の記—

佐々井 利 夫

本年3月末をもって森下恭光教授がご定年によりご退職されることは、すでに身近な方々においては周知のことであったが、先生の年齢を感じさせない諸々の業務への熱心なご対応や普段の言動を知る一人として、その時を迎えたという現実を受け入れがたく思われる。特にこの4月、本学に待望の教育学部が新設される時期において、教学上の運営や教員養成に豊かな経験を持つ先生のご退職は、きわめて残念なことである。

長年にわたる先生からのご厚誼に深い感謝の気持ちをこめつつ、エピソードをまじえて送別の辞を述べさせていただきたい。

森下先生についての私の記憶は私の大学入学時に始まる。当時、先生は研究室の副手をされていたのでお見かけする機会はあったが、お話しすることはなかった。しかし若手の研究者としての精悍な表情と細身のお姿は、45年経過した今も眼に浮かべることができ、先生とする母校についての思い出話のなかにいつもよみがえるのである。先生との直接のかかわり合いは、私が1975年に明星大学に奉職したときからである。以来、教学と事務の両面において懇切なご指導をいただき、仕事を離れた日常のお付き合いもあり、豊かで有意義な日々を過ごさせていただいた。

先生は、別紙にもある通り、本学においてその草創期から今日における発展期までを、時に大学運営の中枢にも身を置きながら支えてこられ、多大の貢献をされた方である。今はそのご活躍を知る人も学内に少なくなったが、お若い時からご研究・教育指導だけでなく、長い年月、教務や総務の要職にあり、お一人で何役も兼務されていた。何役も兼務ということについては、今でも具体的に思い出すことのできる場面がある。それは入試の時（当時は受験生も多く、業務は主として手作業であった）、その教学、事務両方の実務上の総責任者でありながら、当時実施されていた面接担当者でもあり、採点担当者であり、事務方の具体的な指図（例えば業務に携わる人のお弁当の手配）までされていた。身近で採点（担当の国語の採点は4、5日間あり、10時ごろから始まり21時過ぎることもあった）をとともにしながら、採点だけで疲労困憊する教員を尻目に、ご自身の総責任者としての過重なご負担・ストレスを周囲に感じさせることのない先生の精神的体力的エネルギーの凄さに圧倒されたものである。

ご研究面では、文学と教育をテーマにされて、夏目漱石を中心に多くの論文を発表されてきた。漱石については、本学の教育学研究紀要に本号を入れて14報の論文があり、先生の漱石へのご傾倒ぶりがうかがえる。いずれのテーマも漱石という筆名ではなく、本名である「教師夏目金之助の研究」となっており、教師としての夏目漱石の実像に迫ろうと

した意気込みがうかがえる。寺田寅彦、森田草平、小宮豊隆との「師弟関係」などへの言及もあり、夏目金之助の教育的営為にご自身の教育的営為を重ねられていたのだろうか。そういえば、先生は道德教育のテキストにも、道德教育の可能性に触れた部分に「師弟同行」を強調しておられるし、会話の中にも恩師の思い出を語られることが多いことなどを思い起こすと、「師弟関係」は先生の人生観につながる大切なご関心事ではないかと推測されるのである。先生は漱石以外にも国木田独步、宮沢賢治、有島武郎へもご関心を深められていた。このうち国木田独步については、私の学生時代、その大学の紀要の一つである『フィロソフィア』に論文が掲載されており、論文の書き方の参考という意図もあって繰り返し読み返した懐かしい論文である。

大学教員としての森下先生は、多彩なギャグで巧みに学生を惹きつけ、さりげなく親しい教育的関係を作り上げていた。名前と顔をすぐに一致させたり、周囲の学生の誕生日を記憶されたり、「今日は何の日」を講義の最初に問いかけるなど、学生間の人気者であった。誕生日の記憶は大学で働く人々に対しても同様で、森下先生の周りにはいつも笑いがあった。ある結婚式で同席した時、先生が色紙に「笑門来福」と書かれたのを拝見して、先生の普段の言動と重ね合わせ、その表現に納得したことがあった。豊富な読書量に裏づけされた博識ぶりは、特に大学院の授業では十分に発揮されており、授業時間をオーバーすることもしばしばであった。また、学生の個性を柔軟に受け止め、卒論のテーマ、修論のテーマも広範囲に指導されていた。

森下先生と私はともに山陰の出身であり、同じ大学・大学院専攻で学び、副手を務めた。そして明星大学においては同様に長く事務と教学を兼務した。研究室も新研究棟が完成する3年前までは隣であり、道德教育のテキストも二人で著した。相撲が共通の趣味で、言葉遊びを楽しんだ。大学院生たちとの石和温泉への旅行、二人での会津若松への旅なども、思い出深く、楽しい日々を過ごさせていただいた。先生とは7歳の年齢差はあるが、私にとって多くを語らずとも意識の共有ができる心から尊敬できる先輩であった。先生の明星大学をよりよくしたいとの思いを受け継ぎ実践していくことが、これまでの数々のご恩に報いることになるのである。

先生そして激務を支えられた奥様のご健康とご多幸を祈念申し上げ、送別の辞とさせていただきます。

付記

森下先生の「教師 夏目金之助について」と題する最終講義が、1月30日（土）に明星大学26号館202教室で大勢の参加者を集めておこなわれた。先生は、ご講義の最後の部分で、「漱石（夏目金之助）は、教師を天職とは考えていなかった、しかし弟子のその後の活躍をみると、教師としては優れた人物であったといえるであろう」と、まとめられた。そのとき、森下先生の場合はどうだろう、と思った。ご講義の多様な参加者から判断し、また、別席であったパーティでの先生に関係されたいろいろな方々のスピーチを聞いて、「森下先生はご自身、教師・大学人であることを天職と思われていた。また教師・大学人として多くの人たちに慕われる優れた方である」との思いをもったが、先生はどうお考えになっておられるのだろうか。